

経口免疫療法（2）

皆様のご協力をいただき、卵、牛乳、小麦の経口免疫療法に取り組んで参りました。何分小さな診療所ですので強い症状が出現しそうな方にはできませんでした。また、IgE抗体の高さと症状の強さは、パラレルではありませんが、IgE抗体の高い場合にアナフィラキシーショックが多いため、100単位以下の方で、症状が安定していて、経口免疫療法を望んでいる方が対象でした。

卵では、多くの方がタマゴボーロで始めました。香料が添加されていないものを選び、1個のボーロに全卵 20 mg、脱脂粉乳 6 mg、が含まれているものを用いました。2分の1、4分の1の量から始める場合が多く、なかには2個から始めることもありました。牛乳アレルギーが無いが、軽い場合に限ります。4分の1を1日に2回、毎日食べます。次の週には2分の1を、さらに次の週には1個と増やしていきます。30個程になりますと、ゆで卵や自家製ホットケーキに替えて、1.5倍または2倍ずつ1週毎に増やしていきます。

牛乳では、生牛乳を希釈して始めました。1万分の1ml、10万分の1mlから始める場合が多く、1ml、1日2回、毎日食べます。次に、2ml、4ml、8mlと増やしていきます。次には10倍濃い濃度で、1mlから始めます。希釈の仕方は、10mlの注射器を用いれば、簡単にできます。

小麦では、うどん（小麦と塩のみ）を使用しました。0.5 cm、1 cm、2 cm、4 cmと同様に増やしていくのです。醤油の場合は特に、濃度の濃いものに反応するため、薄めて、少量より同様に増やします。大人の方で0.5 cmでは何とも無く、1 cmにしたとたん、アナフィラキシーショックを起こした方がいます。そのメーカーの原材料を取り寄せて調べますと、食塩にとっても強いアレルギーを示すのです。国産の塩ですが詳しくは判りません。放射性物質に過敏な方ではありましたが。

経過中、アレルギーが起こった、と受診される方は多かったのですが、経口免疫療法で症状が出た方はほとんどありませんでした。他の食べ物であったり、花粉やP.M.2.5~0.5であったり、感染症であったりしました。また、量が多くなるにつれ慎重に、少量ずつ増やすようにします。3~4か月でつなぎ程度は、ほとんど問題なく食べられるようになります。どこまで増やすか、どのような頻度で食べていくのかは、経過を見ながら決めていけます。

経口免疫療法開始の量や濃度の決定は、まずアレルギーを起こす最少量の10分の1程度で、体に最適となる量から始めると問題は起きません。

この治療を行って、IgE抗体が少し高くなった方もいますが、大幅に低下した方もありその理由は、はっきりしていません。

これらの検査をしていて不思議に思うことは、もともと体に悪いものが極微量になると体に適量あるいは最適量になるということです。ドイツのS.C.ハーネマンが200年ほど前に発見した同種療法（ホメオパシー療法）に通じるものがあるのでしょうか。今後の課題として見極めていきたいとおもいます。

鈴木 富美